
 学内活動報告

 順天堂大学保健看護学部 順天堂保健看護研究 7
 P.87-93 (2019)

新入生スタートアップセミナー 2018「仁(JIN)への道」の取り組み

 What Was Done as Start-Up Seminar 2018 for Freshman Students
 “The Way to JIN(Humanity)”

鈴木 江利子 ¹⁾ SUZUKI Eriko	林 亮 ¹⁾ HAYASHI Ryo	辻川 比呂斗 ¹⁾ TSUJIKAWA Hiroto	金井 健史 ²⁾ KANAI Takefumi
中村 剛 ³⁾ NAKAMURA Tsuyoshi	江川 潤 ⁴⁾ EGAWA Jun	西野 友子 ¹⁾ NISHINO Tomoko	笹野 幸春 ¹⁾ SASANO Yukiharu
影山 孝子 ¹⁾ KAGEYAMA Takako	榎本 佳子 ¹⁾ ENOMOTO Yoshiko	栗原 明美 ¹⁾ KURIHARA Akemi	長沼 淳 ¹⁾ NAGANUMA Atsushi
榎子 嘉美 ¹⁾ KUWAKO Yoshimi	原 拓也 ¹⁾ HARA Takuya	小川 薫 ¹⁾ OGAWA Kaoru	

要 旨

順天堂大学保健看護学部（以下、本学部とする）では、2010年の開学時以来、新入生向けの研修会（新入生キャンプ）を実施してきた。2017年度からチームビルディング体験を基盤にした初年度教育プログラムを取り入れた本学部独自のプログラム、新入生スタートアップセミナー「仁(JIN)への道」（以下、FSとする）を実施した。FSのねらいは、「新たな大学生活のスタートとして、自己理解、他者理解を深め、主体的に学習するための心構えを身につけること」である。尺度による評価では、「他者受容」や「前向き思考」「リーダーシップ」の向上がみられた。2018年度プログラムでは、チームとしての活動実践を目的として三島市街を散策するピクチャーラリーを計画した。2日目早朝の悪天候により当初の予定通りには実行出来なかったものの、2日間を通して日常生活スキルおよび精神的健康度の上昇が見受けられた。また、荒天時の対応など、今後に向けての課題が明らかになった。新入生については、この体験を元に大学生活の一助となれば幸いである。

索引用語：初年次教育、チームビルディング、アクティブラーニング

Key words：First-Year Experience, Team Building, Active Learning

1. はじめに

本学部では2010年の開学以来、初年次教育として1泊2日の新入生キャンプを実施してきた¹⁾。2016年度の学生部委員会では、新入生キャンプワーキング

グループを立ち上げ、学生生活上の問題をゼロベースで洗い出す中で、自治会活動や臨地実習での学生の対応などを鑑みたその結果、主体的に学ぶ姿勢を持って取り組む力をより高める力が養えるプログラムの必要性が挙げられ、その構築について議論を交わした。

2017年度よりFSとして、チームビルディング体験を核に据えた本学部独自のプログラムを実施する運びとなった。このプログラムは、これからまさに始まろうとする大学生活において、新入生が主体性

 1) 順天堂大学保健看護学部

2) アクセプト

3) 武蔵野大学教育学部

4) 神田外語大学

 1) *Juntendo University Faculty of Health Science and Nursing*

 2) *Accept*

 3) *Musashino University Faculty of Education*

 4) *Kanda University of International Studies*

(Nov. 9, 2018 原稿受付) (Jan. 18, 2019 原稿受領)

や協調性を育み、大学生としての心構えを身につけていられるように検討し作成されたものである。昨年のFS実施前後の調査では、学生の「他者受容」や「前向き思考」「リーダーシップ」の向上がみられた²⁾。

今年度は、プログラムに関するアンケートや学生部委員会での話し合いにより、身体活動を伴い、チームビルディング体験をより深く学ぶことのできる「ピクチャーラリー」を導入することとなった。しかしながら、当日は、悪天候により開始時間が大幅に遅れた。そのため、計画したプログラムを遂行するために、計画した内容を変更しながら対応せざるを得ないことが多々生じた。そのような条件の中、得られた実践結果

について報告する。

II. 実施内容

1. 目的：大学生として新たな生活が始まる中で、自己理解・他者理解を深め、主体的に学習するための心構えを身につける。
2. 場所：順天堂大学 保健看護学部
三島キャンパス / 三島周辺 (2日目)
3. 実施日：平成30年4月14日(土)
8:45～17:00
平成30年4月15日(日)
8:45～17:00

表1 新入生スタートアップセミナー 2018「仁(JIN)への道」プログラム計画と実施

1日目計画・実施		2日目(計画)		2日目(実施プログラム)	
9:30	1. オリエンテーション ・ねらい、進め方の案内 ・グループづくり 2. グループワーク 相互理解を深める話し合い 3. 今のわたし・なりたいわたし① 4. ハイポイント・インタビュー	9:00	7. ピクチャーラリー ・ねらい、進め方の案内	10:30	電車遅延により遅刻者多数のため、教室待機 7. ピクチャーラリー 遅刻者途中参加
昼食は各グループで		昼食は各グループで		昼食は各グループで	
13:00	4のつづき フィードバック ・私たちが大切にすること 5. 今のわたし・なりたいわたし② 6. 今のわたしたち・なりたいわたしたち	13:00	帰学 ・ふりかえり 8. エール交換 9. 私を成長させるアクションプラン 10. 終わりに	14:00	帰学 ・ふりかえり 8. エール交換 9. (アクションプランシートは宿題とした) 10. 終わりに
16:00	解散	16:00	解散	17:00	解散

- 4. 運営者：本学部教員 10 名、職員 1 名、外部講師 5 名、上級生スタッフ 3 名
- 5. プログラム（表 1）
 - 1) 1 日目：オリエンテーション、グループワーク
 - 2) 2 日目：ピクチャーラリー、まとめ

III. 実施結果

1. 1 日目の結果

1 日目のプログラム内容は、表 1 のとおりである。グループワークにおいて、与えられたテーマ（表 2）に基づいて話すことは、お互いの感じ考えていることが、ストレートにわかりあえることができ、相互理解が進み、楽しみながら取り組むことができた。「ふりかえりシート」で、自己紹介から相互理解までのワークを通して、振り返りをした。自己の有り様をわかちあうことは、グループの有り様について理解が深まり、グループの成長につながるため、大事な振り返りとなった。

表 2 相互理解を深める話し合いテーマ

1. 私が今、楽しいと感じることは？
2. 私が今、好きなものは？
3. 私が最近、うれしかったことは？
4. 私が今、大切にしていることは？
5. 私が得意なことは？
6. 私が最近、感動したことは？
7. 私が尊敬する、または好きな人は？
8. 私の名前の由来は？
9. 私が生まれ育ったところは？どのようなところ？
10. 私が大学に入って、これからやってみたいと思うことは？
11. 私が看護師・保健師を目指した理由は？そのきっかけは？
12. 私がなりたい看護師・保健師とは？
13. 私がこのセミナーで得たいこと、やってみたいことは？

特に『ハイポイント・インタビュー』では、「人の想いを感じ、人の痛みを感じる医療人になる」をテーマに、最もやりがいを感じ、生き生きとしていた瞬間とその体験を通して学んだことや、自分が他

者と活動する時に活気やエネルギーを生み出す源になっていることについて互いにインタビューをした。まず、物語を語るように体験を語ってもらい、その体験に導いてくれた思いや考えは何か、大事にしている考え方や支えになった言葉等についてインタビューした。昼休みも活用し、学生たちの主体的な活動時間（約 2 時間）として、自由にインタビューを展開していった。学生は、生き生きとした時の体験を語る時、笑顔で活発に実践していた。

様々なタイミングで行われる振り返りとして、「今のわたし、なりたいたわたし」というプログラムがあり、またグループとしての「今のわたしたち、なりたいたわたしたち」という目標設定を共に行い、翌日のピクチャーラリーでのグループごとのスローガンを決めて、1 日目のプログラムが終了した。

2. 2 日目の結果

今回、グループの活動を机上ではなく実際に与えられた課題を解決する場として、新しく「ピクチャーラリー」というプログラムを導入した。実践の中から失敗しても振り返り、修正しながら成長するプロセスについて体験を通して学んでいくことが目的となる。

具体的方法は以下のとおりである。本部は、順天堂大学保健看護学部キャンパスに置き、三島駅南口を楽寿園エリア、駅北側を上岩崎公園エリア、大学南側を三嶋大社エリアに分けた。（図 1）各エリアの制限時間は、50 分以内とし、各エリアのスタッフから課題を提示された時点で開始となる。まず、各エリアにある「MUST ピクチャー」を探索し、スマートフォンで写真に収め、スタッフに確認してもらう。その後、スタッフから 3 つの「エリアピクチャー」の情報を受け取り、制限時間内に全てのエリアピクチャーを探索する。もしくは、制限時間が経過した時点でスタッフが確認し、そのエリアは終

了となる。それぞれのエリアに移動し、全エリアを制覇して本部に帰校する。前日まで天気予報を随時確認しており、1日日夜間において天候不良が予測されていたが、2日目朝には回復する予報であったため、2日目の通学は、学生便覧に則り行動するように指示し、帰宅させた。



図1 ピクチャーラリーのエリア

2日目は、深夜から早朝の悪天候の影響により、公共交通機関が運転を見合わせる状況であった。学生の集合がまばらとなり、登校できた学生は、教室で待機していた。全員が揃っていない状況であったが、天候の回復に合わせ、プログラム開始時間を10時30分とした。当初の計画では、スマートフォンの携行は、グループに1台とする予定であったが、ピクチャーラリーの途中でも随時遅れてきた学

生が合流できるように、全員のスマートフォンの携行を許可することとした。学生らは臨機応変に対応し、メンバー同士で居場所を連絡しあい、ピクチャーラリーを続行した。結果、最終的な欠席者は5名となった。ピクチャーラリーは、グループのダイナミクスを見るのに適しており、早々に「ギブアップしたい」と申し出るグループや「早く大学に戻ろう」と協力しあい頑張ったグループなど、特徴が顕著であった。最終的にはピクチャーラリーの実施時間を30分短縮した上で全グループが時間内に帰校することができた。

その後、各教室に分かれて、前日に設定した課題やスローガンに対するの振り返りを行った。その様子には、言葉数が少ない、表情、教室の雰囲気などから、やや疲労が感じられた。悪天候の影響から開始時間の遅れがあり、十分な振り返りの時間をとることが出来なかった。そのため、チーム活動中の個々の思いや考え、グループ内の影響関係などについての振り返りよりも、目に見えやすい行動レベルの「大変だった」等のコメントだけで終わる参加者も散見された。しかしながら、互いの持ち味や課題・期待などをメンバー同士でフィードバックする「エール交換」は、集中して記載し、交換時もしっかりと読み上げ、気持ちを伝え合うことができた。また、アクションプランシート（図2）の作成は、全体の振り返りに時間を重点化して取ったために、宿題として持ち帰り、後日提出することにした。

欠席者については、学生部委員が、ピクチャーラリーの目的とアクションプランシートのねらいについて個別面談し、アクションプランシートを提出させた。さらに、大学への連絡をせずに直接グループに合流していた学生については、当日の状況を聞き、集団行動における連絡の重要性について面談にて伝えた。

作成日

わたしを成長させるアクションプランシート

氏名

①今のわたし	
わたしの持ち味	
わたしが身につけたい、改善したいと思ったこと	
大切にしている価値観	

②わたしのありたい姿	

③ありたい姿に向けた目標設定	
目標（いつ、どのようになっているか）	目標を達成するためにやってみたいこと

図2 アクションプランシート

3. 学生部アンケート調査について

学生部委員では、学生アンケートを実施し、次年度の開催内容等についてフィードバックできるように振り返り資料としている。回収率は、参加者126名中126名回収(100%)だった。ピクチャーラリーについて「良い」が82%、「変更希望」が16%であった。「良い」の理由は、「三島が知れた」「団結・協力ができた」が多く、「変更希望」は、「疲れた」「自由に三島を回りたい」の意見があった。主体性について、「とても頑張った」は、33.3%、「まあ頑張った」が64%であった。「頑張った」内容について、「自分の理解が深まった」「他者理解が深まった」「友達・仲間ができた」の意見が多く、「集団行動における主体性が学べた」「内省、共有の繰り返しの意味が分かった」という意見があった。

4. 尺度による評価

FSの事前オリエンテーション時に、コミュニケーション・スキル尺度（以後、CS）⁴⁾、日常生活スキル尺度（大学生版）⁵⁾、GHQ精神健康調査票28項目版（以後、GHQ28）⁶⁾に関する説明を行い、同意の得られた学生に回答してもらい、FS終了後に同様の調査を行った。各調査は無記名とし、通し番号を付けて配布した。なお、ランダムでの配布としたため、個人の特定は不可能である。強制力が働かぬよう自由意思によること、協力しなくとも不利益が生じないことを配布時に説明書を用い、口頭にて説明した。統計処理はSPSS statistics23によるWilcoxonの符号付順位検定をFS実施前後の比較を行った。有意水準は5%未満とした。

1) 調査項目

CSとは①自己統制尺度、②表現力尺度、③解読力尺度、④自己主張尺度、⑤他者受容尺度、⑥関係調整尺度の6の下位尺度、4項目、計24項目で構成され、7件法で回答を求めた。

日常生活スキル尺度とは、①親和性尺度、②リーダーシップ尺度(対人スキル)、③計画性尺度(個人スキル)、④感受性尺度(対人スキル)、⑤情報要約力尺度(個人スキル)、⑥自尊心尺度(個人スキル)、⑦前向き思考尺度、⑧対人マナー尺度(対人スキル)の8の下位尺度、各3項目、計24項目で構成され、4件法で回答を求めた。

GHQ28とは、①身体症状、②不安と不眠、③社会的活動障害、④うつ傾向の4の下位尺度、各7項目、計28項目で構成され、各項目に対して4件法で回答を求めた。低得点である程健康度が高い。

2) FS実施前後における各尺度の変化(表3)

各尺度の実施前後のいずれかにおいて欠損が見られたものは分析対象から除外した。結果、CSでは62名分、日常生活スキル尺度では72名分、GHQ28では67名分が分析対象となった。

各尺度における有意な変化を示した下位尺度とし

表3 新入生スタートアップセミナー2018前後のCSおよび日常生活スキルの変化

上位尺度	下位尺度	pre		post		pre vs. post P値	
		Mean	SD	Mean	SD		
コミュニケーション スキル (n=62)	自己統制	4.74	0.828	4.82	0.826	0.310	
	表現力	4.27	0.925	4.45	1.009	0.061	
	解読力	5.03	1.004	5.14	0.905	0.190	
	自己主張	4.12	0.859	4.31	0.803	0.054	
	他者受容	5.36	0.921	5.39	0.952	0.907	
	関係調整	5.01	0.896	5.23	0.963	0.021	
日常生活 スキル (n=72)	個人ス キル	前向き思考	2.70	0.481	2.79	0.473	0.071
		自尊心	2.48	0.554	2.70	0.569	0.001
		計画性	2.86	0.556	3.05	0.478	0.002
		情報要約力	2.76	0.469	3.00	0.456	0.001
	対人ス キル	感受性	3.26	0.524	3.35	0.611	0.065
		リーダーシップ	2.34	0.562	2.70	0.631	0.000
		親和性	2.96	0.595	3.14	0.569	0.003
		対人マナー	3.43	0.478	3.44	0.600	0.565
GHQ (n=67)	身体症状	1.82	1.780	1.02	1.601	0.002	
	不安と不眠	2.41	2.034	1.45	1.640	0.000	
	社会的活動障害	1.14	1.645	0.50	0.909	0.001	
	うつ傾向	0.77	1.388	0.38	0.893	0.013	

* wilcoxonの符号付き順位検定

有意水準 .05

て、CSでは「関係調整」でスキル向上が、日常生活スキル尺度では「自尊心」「計画性」「情報要約力」「リーダーシップ」「親和性」でスキルの向上が、GHQ28では「身体症状」「不安と不眠」「社会的活動障害」「うつ傾向」で健康度の上昇が認められた。

IV. まとめ

今回、主体的な学びができることを目的に、プログラムをブラッシュアップさせ、活動的なプログラムとして『ピクチャーラリー』を取り入れた。当日の悪天候により、計画通りのプログラム遂行には至らなかった。体験学習の過程においては、体験、内省、観察、分析、仮説化を踏むことが重要である⁶⁾。今回のプログラムの実践では、天候の影響により、開始時間が遅れたことで、時間的制約が生じ、体験の振り返り、共有の時間をとることができなかった。悪条件の中で、得られた貴重な体験を十分に活かせなかったことは、残念であった。しかし、この時点で、「関係調整」「自尊心」「計画性」「情報要約力」「リーダーシップ」「親和性」でスキルの向上がみられたことは、新生活をスタートさせる学生にとって、今後の大学生活にとって有意義な成果であった。また、入学は、発達の危機といわれ、新入生にとっては、精神的負荷がかかる状況である。「身体症状」「不安と不眠」「社会的活動障害」「うつ傾向」において健康度の上昇がみられたことは、新生活のスタート時点において重要な結果であったといえよう。今後、アクションプランシートを用いて、大学生活の目標を学生と教員間で共有しあいながら、自己目標に向かって邁進していくことを期待したい。

FSの目的である「自己理解、他者理解を深め、主体的に学習するための心構えを身につける」ことを達成するために、悪天候時のプログラム遂行のための代替案の構築等さらなるプログラムのブラッシュアップをはかっている。

最後に本プログラム実施に御尽力いただきました武

蔵野大学中村剛先生ゼミ卒業生および本学上級生スタッフに感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 辻川比呂斗、江川潤、林亮他：看護系大学新入生キャンプにおけるセラピューティックレクリエーションプログラムの試み. 順天堂保健看護研究 4, 42-48, 2016.
- 2) 辻川比呂斗、中村剛、江川潤他：新入生スタートアップセミナー「仁（JIN）への道」の作成プロセスとその効果, 順天堂保健看護研究第6巻, 45-52, 2018.
- 3) 藤本学, 大坊郁夫：コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み. パーソナリティ心理学研究 15, 347-361, 2007.
- 4) 島本好平, 石井源信：大学生における日常生活スキル尺度の開発. 教育心理学研究 54, 211-221, 2006.
- 5) 中川泰彬, 大坊郁夫: GHQ 精神健康調査票 手引. 日本科学文化社, 57-66, 1985.
- 6) 津村俊充: プロセス・エデュケーション, 金子書房, 2012.